

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 27 年 5 月 5 日 発行

第 6 号

発行人 校長 鈴木史良

緑の中の新歓ハイキング

—— 随所に見せた上級生の力、その姿から学ぶ下級生 ——

4月30日（木）に楽しみにしていた新歓ハイキングが行われました。前日までの天気予報では曇りのち雨と、あまり喜ばしい予報ではなかったのですが、当日になると青空が広がり、絶好のハイキング日和となりました。午前中2校時までの授業を終えた子どもたちはドッジボールコートに集合しました。A君、Bさんの進行による「はじめの会」で活動の目的を確認し、2つのグループに分かれ、グライフェン・ゼーを目ざして歩き始めました。

それぞれのグループリーダーは中学部のC君とDさんです。リーダーは火おこしに使う薪を大きな袋に入れて運んだり、小学部1年生と手をつないで歩いたりする等、上級生らしい役割を当たり前のように果たしていました。

もう間もなく目的地に着くという頃、牧草地に囲まれたのどかな農道を歩いていると、向こうからやって来た老人とすれ違いました。何やら話し掛けてきたのですが、私には分かりませんでした。すぐに対応してくれたのが中学部のEさんでした。老人は子どもたちが広がって歩いているので、端を歩くように注意してくれたのです。私も、車通りのない農道だったので心配ないだろうと安易に考えていました。引率教員として反省しきりです。

湖のほとりに到着すると、さっそくグループごとにブロックで簡易バーベキュー台を作り、紙や小枝にマッチで火をつけました。子どもたちみんなが協力し合い、手際よく作業が進行していきます。火力が十分になると鉄網をのせ、各自持参したソーセージや串刺しにした肉や野菜を焼きました。あたりに香ばしいにおいが広がりました。この場でも上級生は直接火を扱う作業を率先して行い、下級生たちがおいしく食べ始めるのを確認してから、自分の持参したものを焼くという光景が見られました。

さわやかな青空と春の陽光、湖からのすがすがしい風、近くには一面の菜の花畑、穏やかな自然の中で味わうバーベキューは最高のおいしさでした。

食後の自由時間で遊んだ後は、いよいよ各学級から今年度の学級目標が発表されました。大熱演？の寸劇をまじえての発表は見るものを大いに楽しませてくれました。

帰路、初参加の1年生にとっては長い道のりで、疲れもあったと思いますが、F君、Gさんともに最後までみんなと一緒に歩き通しました。たいへん立派でした。



うあ、おいしそうに焼けている！



グライフェンゼーに現れた妖精たち

【学級目標の紹介】

- 1、2年生・・・ 元気に にこにこ なかよく あしたへジャンプ！
 - 3、4年生・・・ 元気いっぱい努力いっぱいチャレンジ大好き助け合ってなかよくハッピー
 - 5、6年生・・・「全力投球」笑顔でみんなをハッピーに！～No Smile, No Life～
- 中学部・・・ Make it simple ～つくろうよ「本質」の炊きこみご飯

アンモナイト化石発見の快挙！

4月29日(水)、理科の時間、砂場後ろのフェンス沿いでアブラナ科の植物を探していたH君が、なんとアンモナイトの化石を発見しました。アンモナイトは古生代(約4億年前)に誕生し、中生代(約6700万年前)に恐竜とともに姿を消しました。貝のようですが、実はイカやタコの仲間だそうです。チューリッヒ日本人学校のある場所は、かつて海底だったということですね。(資料提供・S先生)



詩を楽しむ

かぼちゃのつるが

かぼちゃのつるが

はい上がり

葉をひろげ

葉をひろげ

はい上がり

短くなった竹の上に

はい上がり

小さなその先たんは

いっせいに

赤子のような手を開いて

ああ 今

空をつかもうとしている



原田 直友

体育館脇にある学校菜園が冬の眠りから目覚めた。雑草が取り払われ、畝が学年別に盛り上がっている。目覚めは、三、四年生の畝からはじまった。トマトの苗が行儀よく並び、その奥にじやがいもも植えられた。これから芽や茎や葉が伸びてくるのが楽しみだ。

ロンドンに赴任していたころ、日本のかぼちゃの種をもらって自宅裏庭の芝生の隅に植えたことがある。そのうちに芽が出てつるがぐんぐん伸び出した。園芸に疎い私は、竹につるを絡ませることも知らずに放置していると、つるは芝生の上を這うようにどこまでも伸びていった。三メートルくらい伸びたところで黄色い可憐な花が咲き、その花が終わると小さな実をつけた。一応かぼちゃの形になったので、収穫して食べてみると、さすがに日本のかぼちゃだ。ほくほくした食感があり、英国のスーパーで買った水っぽいかぼちゃとは一味違った。

この詩の「はい上がり、はい上がり、赤子のような手を開いて、空をつかもうとしている」かぼちゃは、私のかぼちゃより百倍も美味しくなるに違いない。